

〔研究ノート〕

我が国におけるケルシェンシュタイナー 関係文献目録及び解題 (Ⅱ)

山 崎 高 哉
Takaya Yamazaki

大阪総合保育大学
児童保育学部

本文献目録及び解題は、我が国においてドイツの教育改革者にして教育学者ゲオルグ・ケルシェンシュタイナー (Georg Kerschensteiner, 1854–1932) の教育思想と実践を紹介した単行本・叢書・講座等並びに雑誌・学会誌・研究紀要等に掲載された論文・記事について発表順に列記し、かつ解題を施したものである。ただし、紙幅の関係から、本号では、単行本・叢書・講座等に発表されたもののみを取り扱うものとする。

個々の著作に関しては、著・訳者、書名、発行年月、概要の順で記述した。発行年月が同じものについては発行日順、発行日が同じ場合には五十音順に並べた。また、同一著作に数編の論文が掲載されている場合にはその掲載順に記しておいた。

著作・論文の概要は、著者の言葉をできるだけ原典通りに引用することを旨とした。なぜならば、ケルシェンシュタイナーに対する著者の評価・見解を忠実に伝えるためと、例えば、Arbeitsschule の訳語一つを取ってみても、著者により「勤労学校」、「作業学校」、「労作学校」、「労働学校」等様々に訳され、しかも訳語自体既にその思想に対する著者の基本的立場を表明している場合が少なくないからである。翻訳・紹介については、その原書・出典を明記した。

本文献目録は、大阪府立図書館、京都大学附属図書館、京都府立資料館、国立国会図書館、天理大学附属天理図書館、東京教育大学附属図書館、富山大学附属図書館、奈良女子大学附属図書館、広島大学附属図書館、龍谷大学大宮図書館所蔵の図書・雑誌類を中心に作成したものである。できるだけ詳細に調べたつもりであるが、まだ多くの遺漏があることと思う。また、文献の存在はわかっていながら、筆者未見のため本目録に収録できなかったものも少なくない。お気づきの点をご教示いただき、今後完璧を期したい。

本文献目録の作成に当たって、梅根悟「日本に於けるケルシェンシュタイナー関係文献」(『教育学研究』第1巻第3号、昭和7年6月)及び東岸克好「わが国におけるケルシェンシュタイナーに関する主な文献」(ケルシェンシュタイナー東岸克好訳『労作学校の概念』、玉川大学出版部、昭和40年7月)を参照した。また、恩師篠原陽二先生を初め、石附実(天理大学・大阪市立大学)、稲葉宏雄(京都大学)、高野兼吉(富山大学・創価大学)の、今は故人になられた諸先生方には文献の所在をお教えいただいたり、貴重な文献を拝借させていただいたりした。記して厚く謝意を表するとともに、ご冥福をお祈り申し上げる。

本文献目録は、かつて昭和46・49年度文部省科学研究助成費による「大正期教育の総合研究」(代表者、池田進京都大学教授)における個人分担テーマとの関連で作成したものである。ここに収録された文献を基に、筆者は拙稿「わが国におけるケルシェンシュタイナー紹介と受容一大正期を中心として」(池田進 本山幸彦編『大正の教育』、第一法規、昭和53年9月)をまとめた。ご参照いただければ幸甚に存ずる次第である。

なお、本文献目録及び解題(Ⅱ)は、富山大学教育学部紀要第29号(昭和56年3月刊)と第30号(昭和57年3月刊)に掲載されたものに、その後所在が明らかになったり、新たに出版・発表されたりした著作・論文等を増補して作成したものである。

Ⅱ 単行本・叢書・講座等に発表されたもの

- 1 乙竹 岩造 実験教育學 目黒書店 明、41、11

緒論「最近に於ける教育學説上の四潮流」において、「社會的教育學説の中でも重(ママ)に貧民教育の方面を發揮したもの」と

して G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (1901) の大要を紹介。

- 2 槇山 榮次 教育教授の新潮 弘道館 明、41、11
第 20 章「マンハイムの小學校編成法」において、ジッキンガー (Josef Anton Sickinger, 1858-1930) の紹介に際し、G. K. を引き合いに出し、「共に獨乙に於ける現時の教育行政家として有名な人」として紹介。
- 3 森岡 常藏 近時に於ける教育問題の研究 文昌閣 明、42、3
(10)「教科課程案論の一研究」において、前号掲載の雑誌論文 I-1 (以下、I-1 と表記) の表題を一部変更して再録。
- 4 槇山 榮次 教授法の新研究 目黒書店 明、43、10
第 8 章「實用主義の教授と發表教授」において、G. K. の論文 Berufs-oder Allgemeinbildung? (1904) に拠りながら、ミュンヘン市の「小學校教育に對する施設は實際的陶冶を施すことを主眼」とし、この「方針に適したる事柄を實行」していると詳しく紹介。また附録第 4「獨逸に於ける教育研究の趨勢」においては、彼のチューリッヒでの講演 Die Schule der Zukunft eine Arbeitsschule (1908) の内容を簡単に伝えるドイツの師範學校教師の槇山宛書簡を紹介。
- 5 西山 愼治 最近思潮實際教育の新研究 敬文館書房 明、43、12
第 1 編第 3 章「獨逸の實業教育」において、G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (1901) に言及し、「ミュンヘンの實業學校は此れ全く同博士の此の論文によつて呼び起され博士の理想を實現したるもの」と紹介。
- 6 谷本 富 歐米教育視察談 (富岡秀耀編『海外に於ける最新教育思潮と其教育振』所収)
教育通信社 明、44、6
ドイツ教育界における「最新思想」として「アルバイテル (ママ) シュレー (家事學校)」論を挙げ、G. K. をその「最初の主張者」で、「一時ミュンヘンを以て此運動中心とした」と紹介。
- 7 吉田 熊次 國民生活本位の教育主義 (同上) 教育通信社 明、44、6
I-5 の再録。
- 8 槇山 榮次 小學校に於ける實際問題の理論的研究 目黒書店 大、元、10
特に第 1 章「小學校令第一條の國民教育」、第 2 章「共同作業及其個性發揮に對する關係」及び第 3 章「生産的作業と作業學校説」において、G. K. の「國民教育」説と「實用的作業學校」説に論及。
またミュンヘンの國民學校第 8 学年の教科課程と我が国の明治 44 年 7 月の小學校令及び同施行規則の一部改正の趣旨との類似性を随所で強調。
- 9 中島 半次郎 獨逸教育見聞記 目黒書店 大、元、11
特に第 4 篇「バイエルン王國」[第 2]「ミュンヘン市の教育」において、「ミュンヘン市……をして實業補習教育に於ては世界第一の教育的都府たる名誉を荷はしむるに居りしは、今の市學務官ケルシエンシュタイナー氏の努力に依る」として、彼の「勤勞主義」とそれに基づく「實業補習學校」の組織について詳述。
- 10 佐藤 熊治郎 作業主義の教育 (廣島高師教育研究會編『教育研究會講演集』第 7 輯所収)
金港堂 大、2、4
「作業主義の主張者として第一に指を屈せらるゝもの」として G. K. の名を挙げ、彼の著 Grundfragen der Schulorganisation (1907) における所説と國民學校第 8 学年での実験を紹介、批判。
- 11 谷本 富 洋行土産談 六盟館 大、2、5
第 2 篇「歐米教育所見」において、「ミュンヘン市の學事參事官ケルシエンスタイン (ママ) 氏の唱道したる」「アルバイト、シュレー即ち仕事學校」という「最新思想」について簡単に紹介。
- 12 藤原 喜代藏 都市及田園の教育 金港堂 大、2、6
「都市の實業教育」第 2 款第 3 項「ミュニツヒ (Münich) 市の補習教育」において、I-14 を再録。
- 13 吉田 熊次 教育教授の諸問題 目黒書店 大、2、11
第 8 章「圖畫教授及び唱歌教授に關する問題」において、G. K. の著 Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung (1905) の研究結果に簡単に言及。また附録 1、「國民的教育問題」及び 2、「アルバイツシュレ問題」(I-15 参照) においても、彼の教育論を紹介。
- 14 宇都宮 虎雄 歐米學校參觀記 大日本圖書 大、2、11
「獨逸之部」「ミュンヘン市」の章において、特に G. K. の改革になる「實業補習學校」を「世界に誇る程のもの」とし、その成立過程、組織、學校の一般方針などについて述べるとともに、「諸外國に於ても此の方針を採用し、或は人を派して視察せしめるもの日に多きを加ふるに至つた」と紹介。

- 15 入澤 宗壽 晩近の教育思潮 弘道館 大、3、1
特に第1章「生活本位の教育」、第2章「國家公民的教育」及び第4章「制作作業中心の教育」において、G. K. の教育思想を紹介。また、「附録第一」にI - 28を収録。
- 16 湯原 元一 歐米教育界の新趨勢 金港堂 大、3、2
第11「實業補習學校（評判高きミュンヘンの仕事學校）」において、G. K. を「一部では教育社會のビスマルクとまで呼ばるゝ程の評判の人」と紹介し、彼の「教育意見」及び「ミュンヘン仕事學校の成功」について詳論。
- 17 入澤 宗壽 近代教育思想史 弘道館 大、3、6
第4篇第2章「社會派の教育思想」において、「社會生活中心、作業手工中心、活動中心の教育説を主張し實行して居るもの」としてG. K. に言及。
- 18 大瀬 甚太郎 最近の教育思潮（教育新潮叢書第4巻） 教育新潮研究會 大、3、7
第3章第4節において、G. K. の「公民教育説」、第5章第2節2において彼の「公民教育の見地に基く作業主義」、同第6節において彼の「作業主義」が「實地教育」に及ぼした影響に論及。
- 19 白土 千秋（小西重直校閲） 勤勞學校の意義及其經營法 弘道館 大、3、10
G. K. を「勤勞學校の主唱者」と見なし、特に第5、「勤勞學校の根據」と第6、「經營の要件」において、彼の著 Grundfragen der Schulorganisation (1907) 及び Begriff der Arbeitsschule (1912) の要点を論述。また、第13、「實業補習教育に就いて（附説）」で、彼の実業補習學校の教育方針及び方法の大略を紹介。巻頭に著者に寄せた G. K. の書簡を掲載。
- 20 乙竹 岩造 現代教育教授思潮 目黒書店 大、3、11
第1章「勤勞作業教育思潮」、第9章「復活せる品性陶冶論」及び第12章「公民教育問題」において、G. K. の当該教育説について詳論。
- 21 湯原 元一 勤勞教育に就て（文部省専門學務局編『商工補習教育講演集』所収） 文部省 大、3、12
G. K. の「勤勞學校」、殊に「實業補習學校」が「最も能く……勤勞主義を實行して居る」として、その理論と実際の組織について紹介。
- 22 手島 精一 工業補習教育に就て（同上） 文部省 大、3、12
I - 42を参照。
- 23 稲毛 詛風 現代思潮と教育 大同館 大、4、1
第4章「現代教育思潮の概観」において、G. K. を「實生活本位の教育」、「國家公民的教育」、「手工的作業中心の教育」の主張者とし、その学説に論及。
- 24 湯原 元一 最近教育學界の二大思潮 附 人格教育學精評 東京 晩成處&目黒書店 大、4、4
「公民教育論」において、G. K. の「國家公民的教育」の概念とその「實行上の意見」について紹介、批判。「勤勞教育論」はI - 41の再録。
- 25 岡山 秀吉 歐米諸國手工教授の實況（教育新潮叢書第10巻） 教育新潮研究會 大、4、4
第9章「獨國手工科教授の狀況」において、G. K. を「國家的勤勞主義教育の主張者として有名」と紹介し、ミュンヘン市の国民學校及び補習學校における手工科の実施狀況について報告。また、同市における「特別の圖畫獎勵學級」についても「その成績は非常に進歩したものである」と紹介。
- 26 吉田 熊次 現今教育思潮批判（教育講座第7編） 日本學術普及會 大、4、5
第4章「主意主義的教育思潮」及び第8章「國民的教育の思潮」において、G. K. を「現今世界に於て有名なる實際教育者の一人」とし、彼の「勤勞學校論」と「國民的教育説」について紹介、批判。
- 27 川本 宇之介 公民教育の理論及實際 大同館 大、4、10
特に第2篇「公民教育の理論」において、G. K. を「啻に實際教育殊に補習學校に於ける公民教育に偉大の活動を至誠を以てなしてゐるのみでなく其の理論に於ても又他のものより遙に精細であり、識見又非凡で他の主張者の遠く及ぶ所でない」と称賛し、彼の公民教育思想を詳論かつ批判。
- 28 文部省専門學務局 英國より見たる獨逸の實業補習教育 文部省 大、4、11
イギリス人のベスト（Robert Hall Best）とオグデン（Charles Kay Ogden）の共著 The Problem of the Continuation School and its Successful Solution in Germany (1914) から、主にミュンヘン市の実業補習學校に関する部分を抄訳。G. K. の寄せた緒言を巻頭に掲載。
- 29 梯 英雄 作業主義教授の新研究 目黒書店 大、4、12

- 第1篇第1章「作業主義の主張」において、G. K. を「國家公民教育、實用的教育の見地より出た」「手工中心派」と分類し、彼の主張を簡単に紹介、批判。
- 30 入澤 宗壽 現今の教育 弘道館 大、4、12
特に第3章「作業教育と自動教育」及び第4章「公民教育と公民教授」において、G. K. を「現實派」の「作業主義者」「公民教育」論者と規定、彼の所説を紹介。
- 31 佃井 久満治 ケルシェンシュタイナー公民教育及補習教育論 大同館 大、5、1
G. K. の主要著作 Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung (1910) と Charakterbegriff und Charaktererziehung (1912)、さらには Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (1901) と Grundfragen der Schulorganisation (1906) の英訳本から、その根本思想と組織論を要約して紹介。
- 32 湯原 元一 教育及教育學の改造—實際的教育の主張 目黒書店 大、5、1
第3「教育學説に對する教育家の態度」及び第18「立憲的國民教育」において、G. K. の所説に簡単に論及。
- 33 乙竹 岩造 輓近教育事實の進歩 目黒書店 大、5、3
第1章「生活教育の徹底」、第2章「作業教授の進歩」及び第4章「實業補習教育の發達」において、G. K. の思想と実践に論及。
- 34 文部省専門學務局 ミュンヘン市實業補習學校ノ組織並教程 文部省 大、5、5
G. K. が編集した報告書 Organisation und Lehrpläne der obligaten Fach-und Fortbildungsschulen für Knaben in München (1910) の翻訳。
- 35 川本 宇之介 最新思潮職業教育の研究 目黒書店 大、5、6
第3章「職業教育と陶冶」、第7章「實科の研究」、第8章「尋常小學校と職業教育」、第9章「高等小學校と職業教育」及び第10章「實業補習學校」において、主として G. K. の職業教育に関する理論と實際について詳論。
- 36 岡山 秀吉 新手工科教授 東京寶文館 大、5、7
第1篇第4章「獨國」において、ミュンヘン市の「教育は、特に技能教授の方面に於て異彩を放つて居る」として、その国民學校と実業補習學校の状況を紹介。また、第2篇第1章「漸近手工教授諸主義」においても G. K. の所説に簡単に言及。
- 37 大瀬 甚太郎 最近世歐米教育史 成美堂 大、5、10
第5篇第4章「ゲオルグ（ママ）・ケルセンスタイネル（Georg Kerschensteiner）と公民教育」、第7篇第2章第2節「ケルセンスタイネルの作業主義及び其の實行」において、彼の当該教育論について紹介。
- 38 山田 春耕・小林 正美 勤勞教育と作業教授 魁文堂・育英書院 大、6、3
3「勤勞教育作業教授問題」において、G. K. を「最近に於て獨逸教育家中の屈指的人物」と紹介し、彼の「勤勞教育」論に言及。
- 39 横山 榮次 新教授法の原理及實際 目黒書店 大、6、4
特に第2章第3節「新形式陶冶主義」において、G. K. を「實用主義を採つて居るから、形式説の反對であるかの如く考へられて居るけれども、余の見るところでは寧ろ形式陶冶説を主張して居る者」であるとして、彼の「作業學校」説を簡単に紹介。
- 40 川本 宇之介 補習學校の組織及經營 目黒書店 大、6、6
G. K. の「補習教育論」とその実践について随所で紹介。
- 41 渡部 政盛 最近教育學説の叙述及批判 大同館 大、7、3
特に第5章「國民的教育學の思潮及批判」、第9章「教授訓練の主義方針に關する思潮及批判」において、G. K. を「現今教育の革新者」の一人で、「近時に於ける公民教育・勤勞作業主義・補習教育等の提唱者として有名なる人」と紹介し、彼の所説に論及、批判。
- 42 篠原 助市 最近の教育理想（尼子止編『最近教育の進歩』所収） 早稲田同文館 大、7、4
7において、G. K. を「現今國民教育論者として特に名あるもの」及び「勤勞學校主張者の翹楚」とし、彼の學説を紹介、批判。
- 43 金生 喜造 獨逸の公民教育 弘道館 大、7、10
第1章「緒論」及び第2章「公民教育の本質」（I - 80 参照）において、G. K. の「公民教育」説について紹介、第3章から第10章までは彼の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (4. Aufl., 1909) の翻訳・評論（I - 59・78・82の再録を含む）。
- 44 近代學術研究會 新潮教授法大集成 中興館 大、8、10
第5篇第1章の2、「教材論の根本問題」において、G. K. の「教材論」及び「教科案」論を簡単に紹介。
- 45 谷本 富 現代思潮と教育の改造 同文館 大、9、1
第2章「現代的教育思潮」において、G. K. とガウディッヒ（Hugo Gaudig, 1860-1923）を「勞働的教育學」の「二つの異った代

表者」として挙げ、後者に左袒。

- 46 湯原 元一 教育と文化 天佑社 大、9、5
第1篇第3「實行教育に就いて」及び第12「外國に於ける青年團體の組織及經營」において、G. K. の「勤勞教育」「實行教育」に関して簡単に紹介。
- 47 槇山 榮次 教育の所説と其實際的價值 目黒書店 大、9、12
特に第7章「ケルシエンスタインの國民的教育説」及び第14章「作業主義的教育」において、彼の所説に論及。
- 48 關 衛 普通教育に於ける藝術的陶冶 同文館 大、10、9
特に第8章「兒童の美的判斷及描畫能力の研究」及び第10章「普通教育に於ける圖畫教授に就いて」において、G. K. の著 Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung (1905) に依りながら、彼の児童画に関する「該博精緻」な研究結果を詳説。
- 49 中島 半次郎 教育思潮大觀（思潮叢書第3篇） 東京堂 大、10、10
特に第2章の7「勤勞主義」及び第9章の7「公民教育」において、G. K. の思想と実践に言及。
- 50 川本 宇之介 デモクラシーと新公民教育 中文館書店 大、10、11
第2編第3章の8「教育の社會化と社會的教育化」において、G. K. の「公民教育」の理論と実際について論述。
- 51 入澤 宗壽 教育新思潮批判 隆文館 大、10、12
特に第10章「作業教授」において、ガウディッヒが「大組織家としてのケルシエンシュタイナーには多大の敬意を拂ふけれども、その見解には反對せざるを得ぬ」と述べて展開したG. K. 批判を検討するとともに、ブルガー（Eduard Burger, 1872-1938）を初め、諸家の「作業學校」説の紹介を通して、G. K. の所説にも言及。
- 52 關屋 龍吉 實業補習教育ニ於ケル公民教育（新潟縣教育會編『實業補習教育講演集』所収）
新潟縣教育會 大、11、3
G. K. を「實業補習教育のオーソリティー」とし、彼の「公民教育」説やミュンヘン市の補習學校の教科について紹介。
- 53 金井 十郎平 實業補習教育の文化的革新と其の經營 白水社 大、11、4
第2章2「獨逸に於ける補習教育の状況」及び7「模範とすべき革新のミュンヘン補習教育」において、G. K. を「獨逸國に於ける斯道の大家」とし、彼の補習教育論とミュンヘンの補習學校制度について詳しく紹介。
- 54 關屋 龍吉 實業補習教育に於ける公民教育（文部省實業學務局編『實業教育講演集』所収）
帝國地方行政學會 大、11、4
前出52を参照。
- 55 中島 半次郎 實業教育の理論（同上） 帝國地方行政學會 大、11、4
（1）「實業補習學校の教育の目的」及び（3）「實業補習學校に於ける訓育」において、ミュンヘンの補習學校の教科や設備、「勤勞作業團體の組織」について紹介。
- 56 渡邊 龍聖 獨逸に於ける教育の現状と實業補習教育（同上） 帝國地方行政學會 大、11、4
G. K. を「獨逸現在の補習教育上、最も大なる貢獻を爲した」として、彼の補習教育に関する主張と事業について紹介。
- 57 篠原 助市 批判的教育學の問題 東京寶文館 大、11、5
1、「最近の教育理想」は前掲42の再録。
- 58 入澤 宗壽 新教授法原論（最新教育學叢書第15卷） 教育研究會 大、11、5
特に第6章「教材價值論」及び附録5「國際教育の思潮」において、G. K. の著 Deutsche Schulerziehung in Krieg und Frieden (1916. 以下 Deutsche Schulerziehung と略記) の大要を紹介。
- 59 林 鎌次郎 最新歐米教育史（同上叢書第5卷） 教育研究會 大、11、9
特に第8章第1節第3項「ナトルプとケルシエンスタインの社會教育制度論」において、G. K. の「公民教育」説に簡単に言及。
- 60 田制 佐重 教育的社會學（同上叢書第9卷） 教育研究會 大、11、10
附録「勤勞教育思潮大觀」において、I - 93を再録。
- 61 岡 篤郎 實業補習教育制度（秋田縣教育會編『文部省主催實業補習教育講演集』所収）
秋田縣教育會 大、11、12
G. K. を「今日彼の有名な實業補習教育制度に付て獨逸に於て最も貢獻した一人」とし、彼の「實業補習教育改善に對」する「根本的の意見」に簡単に言及。
- 62 渡邊 龍聖 都市實業補習教育（同上） 秋田縣教育會 大、11、12
G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (1901) が「逸獨（ママ）全帝國に於ける、否な寧ろ世界に於ける、

- 補習教育の一新紀元をなした」とし、「全獨逸の最も進歩して居る」ミュンヘンの「實業補習學校の改善政策」について詳論。また、ミュンヘン市の補習教育とベルリン市のそれとを比較。
- 63 關屋 龍吉 實業補習學校に於ける公民教育（同上） 秋田縣教育會 大、11、12
G. K. の「公民教育」の定義と「公民教育を為すに當つての注意」について簡単に紹介。
- 64 小林 澄兄 最近教育思潮批判 明治圖書 大、12、2
第3章「歐米教育の最近の傾向」において、G. K. の「作業學校論」を簡単に紹介。
- 65 吉田 熊次 最近教育思潮 教育研究會 大、12、3
第2編第3章「主意的新教育思潮及び其の批判」において、「主意主義は輒近に於て流行する思潮の一つ」であるが、「其中の經驗的教育思潮に屬するもの」の一つとして、G. K. の「勤勞學校」説に簡単に言及、批判。
- 66 岡 篤郎 實業補習公民教育の研究 明治圖書 大、12、3
特に第10章「ケルシエンシュタイナーの公民教育」において、「獨逸の實業補習教育の組織と、特に公民教育の方針に至つては、實に、」G. K. の「効績の偉大なことを忘れてはならぬ」として、彼の公民教育説について詳論。
- 67 入澤 宗壽 國民教育の思潮—修身訓練の根本問題 教育研究會 大、12、4
上篇第4章「國際教育と國民教育（2）」において、G. K. をライ（Wilhelm August Lay, 1862-1929）とともに「現實的に國民心から世界心へを説く」論者とし、彼の主張における國際教育と國民教育との關係に言及。
- 68 下中 弥三郎 萬人勞働の教育 内外出版 大、12、5
特に第1章「萬人勞働の教育とは何か」において、G. K. の「勤勞學校の主張の要點」を紹介、批判。
- 69 入澤 宗壽 新教育方法の研究（内外教育學叢書第3卷） 内外出版 大、12、6
特に第3章「作業原理」及び「國民教育の新方法」において、G. K. の所説にしばしば言及。
- 70 岡部 為吉 教育と内省 イデア書院 大、12、11
1、「公民教育」はI-37、5、「創作と實知」はI-77、7、「創作能の性質と養成法」はI-83の再録。
- 71 教育新潮研究會 最近公民教育大觀 中興社 大、13、4
第2篇「公民教育の概念」及び第3篇「公民教育の沿革」において、G. K. を「近世公民教育の始組（ママ）」とし、彼の公民教育論を紹介した遠藤順一（I-94参照）、乙竹岩造（上掲20参照）、千葉敬止（I-95参照）及び大瀬甚太郎（上掲37参照）の著作、論文・訳文を収載。
- 72 教育新潮研究會 最近補習教育大觀 中興社 大、13、4
第1篇第4章「歐米に於ける補習教育の發達」において、G. K. を「獨逸の補習教育に最大の貢獻者」とし、彼の所説とミュンヘンの實業補習制度の概要を紹介。
- 73 入澤 宗壽 新教育法講話 天地書房 大、13、5
特に第5章「獨逸に於ける新教育法」において、G. K. の「作業學校の主張」を紹介。
- 74 教育研究會 教育新學説の體系的研究 香柏堂 大、13、6
特に第2章「社會的教育學説」及び第3章「作業的教育學説」において、G. K. の「公民教育」「作業教育」説とその「實際の方策」について紹介。
- 75 千葉 敬止 實業補習學校に於ける公民教育（福井縣編『公民教育講習會講演集』所収）
福井縣 大、13、6
2、「實業補習學校に於ける職業教育」及び3、「實業補習學校に於ける公民教育」において、G. K. の思想と業績に簡単に言及。
- 76 小林 澄兄 續最近教育思潮批判 明治圖書 大、13、9
第3「社會化の教育思想と運動」において、G. K. の「公民教育」論と「作業學校」論を紹介、評論。
- 77 木村 正義 公民教育總論（文部省實業學務局編『公民教育講演集』第1輯所収）
實業補習教育研究會 大、13、10
2「公民教育の目的」において、G. K. の「公民教育」を「國家意識への教育」と規定、その大略を紹介。
- 78 吉田 熊次 現代教育學説選集（新訳世界教育名著叢書第XⅡ卷） 文教書院 大、13、10
「ケルシエンシュタイナー」の部において、G. K. を「最近数十年間の獨逸の教育界に於て最も大なる勢力を持てる人の一人」とし、彼の「國民的教育の概念」及び「學校系統論」について紹介、評論。
- 79 鈴木 静穂 實業補習教育公民科教授 明文堂 大、13、11
第2章「歐米に於ける公民教育」において、G. K. の「公民教育」説に簡単に言及。また、木村正義の論文（I-96）を収載。

- 80 千葉 敬止 新制実業補習教育講話 教育研究会 大、13、11
第5章「歐米の実業補習教育の発達」及び第9章「実業補習教育に於ける公民教育」において、G. K. を「獨逸の実業補習教育の発達上に、最も貢献をなした」とし、彼の補習教育論、公民教育論と「今や全世界における補習教育の範となりつゝある」ミュンヘンの補習学校施設について詳論。
- 81 文部省実業學務局調査室 獨逸實業教育制度 文部省實業學務局 大、14、2
第1編第3章第1部「統一學校 Einheitsschule」3において、G. K. の「獨逸教育會議 (Reichsschulkonferenz, 1920)」における報告の要旨 (I - 97 参照)、第4章(1)「ケルシエンシュタイナー博士公民教育論 Staatsbürgerliche Erziehung v. Dr. G. Kerschensteiner」において、I - 94 を収載。
- 82 入澤 宗壽 文化教育學と新教育 教育研究会 大、14、4
特に第7章「教育者の精神」において、G. K. の Die Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung (1921. 以下 Die Seele des Erziehers と略記) の概要を紹介。
- 83 吉田 熊次 輓近の教育及教育學 教育研究会 大、14、5
「輓近の教育」第6章「獨逸に於ける勤勞學校の問題」において、G. K. の「勤勞學校」を「實利主義實行主義經濟主義の教育」と規定し、ガウディッヒの「自由精神作爲主義」やエストライヒ (Paul Oestreich, 1878-1959) の「生産學校主義」と比較。
- 84 木村 正義 公民教育 富山房 大、14、9
G. K. を「獨逸に於ける公民教育の權威者」として、特に第3章第3節の1において、彼の「公民教育論」、第7章第4節の4において、「ミュンヘン市実業補習學校に於ける公民教育」の内容 (I - 105 参照) 及び第9章第4節の1において、彼の「公民教育方法論」を詳説。
- 85 上島 直之 最新歐米教育の實際 東洋圖書 大、14、10
第2編第2章第3「獨逸の新教育」において、G. K. の「作業學校」、第3編第1章第2「獨逸に於ける実業補習教育」において、ミュンヘン市の実業補習學校について紹介。
- 86 関 衛 藝術教育思想史 厚生閣 大、14、10
第9章「現代藝術教授の諸問題」及び「藝術教育研究の近況」において、G. K. の図画教授論を紹介。
- 87 木村 正義 公民教育概論 (文部省實業學務局編『公民教育講演集』第2輯所収)
実業補習教育研究会 大、14、10
5「公民教育の意義」及び8「公民教育の方法」において、G. K. の公民教育論に簡単に言及。
- 88 後藤 俊瑞 公民教育原論 平凡社 大、14、11
G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend (4. Aufl., 1909) の翻訳。
- 89 三浦 藤作 精神科學派の哲學及び教育學說 (教育講座叢書1) 帝國教育會出版部 大、14、12
第3章第6節「ケルシエンシュタイナーの教育學說」において、G. K. の「文化と教育」及び「教育者」に関する所説について簡単に紹介。
- 90 渡部 政盛 デイルタイ派の哲學とその教育學說 啓文社 大、14、12
第5章「デイルタイ派の教育學說」4において、G. K. を「今や立派な文化教育學者の一人」として、彼の思想的變化の理由を説明。また、「文化教育學者」G. K. の所説の参考として入澤宗壽の論文 I - 113 を収載。
- 91 教育研究会 教育新學說の體系的研究 啓文社書店 大、15、2
香柏堂刊のものと同内容。前掲 73 参照。
- 92 入澤 宗壽 教育思想問題講話 右文書院 大、15、4
第1章「現今の公民教育問題」において、G. K. の公民教育論、第4章「作業學校の問題」、第7章「文化教育學の主張」、第9章「個性教育論」その他において、彼の文化教育學說を紹介。
- 93 乙竹 岩造 文化教育學の新研究 目黒書店 大、15、4
第10章第2節「ケルシエンシュタイナーの陶冶過程の根本公理」及び第6節「作爲學校主義の教授論」において、G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses und seine Folgerungen für die Schulorganisation (1917. 2 Aufl., 1924. 以下 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses と略記) を中心に彼の文化教育學の理論と實際について紹介、評論。
- 94 千葉 敬止 内外に於ける輓近の公民教育と其の方法 教育研究会 大、15、4
特に第2章第2節「獨逸國公民教育の發展」、第6章第3節「公民教育の意義」及び同第6節「ケルシエンシュタイナー博士の公民教育論」において、G. K. の公民教育論とミュンヘン市実業補習學校の「公民科教授要目」について紹介。

- 95 篠原 助市 教育學綱要 東京實文館 大、15、5
第3章第3節「歴史的教育學」、第4章第4節「一般的陶冶と職業的陶冶」、同第5節「公民教育」及び第8章第2節「作業學校」において、G. K. を「近時の教育學中國家の為の教育を説いた第一人者」または「手工的若しくは經濟的活動を特に重視する」「狹義の作業學校」を説いた「最も有力な代表者」とし、彼の所説を紹介、論評。
- 96 入澤 宗壽 デイルタイ派の文化教育學説（教育思想叢書第2篇） 廣文堂 大、15、5
第2篇第5章「ケルシエンシュタイナーの教育學説—文化教育學者としての—」において、G. K. の Deutsche Schulerziehung、Das Grundaxiom des Bildungsprozesses 及び Die Seele des Erziehers の概要を紹介。
- 97 岡田 怡川 體系的現代教育學説精義 甲子社書房 大、15、8
第3章第6節の1、「ケルシエンシュタイネル公民教育」において、G. K. を「公民教育、作業主義、補習教育の唱導者として名を世界に馳せてゐる」とし、彼の教育説について概説。
- 98 中島 半次郎 公民教育要領 文明協會 大、15、10
随所で G. K. の「公民教育」に関する理論と實際に言及。
- 99 岡田 怡川 文化教育學概論 甲子社書房 大、15、10
第3篇第2章「ケルシエンシュタイナーの文化教育學」において、G. K. の文化教育學説について簡単に紹介。
- 100 入澤 宗壽 文化教育學と體驗教育 同文館 大、15、12
特に前篇5「公民教育論」、6「作業學校論」及び8「教員養成論」において、G. K. の所説に論及。なお、附録3に I - 113 を再録。
- 101 入澤 宗壽 教育六講（現時の教育思想及び教育方法の諸問題）（師範大學講座6）
山海堂出版部 大、15、12
第1篇第4章第4節「文化教育學の主張」及び第2篇第5章第3節「公民教育と青年訓練」、同第4節「共同作業と自治」において、G. K. の教育思想と方法について紹介、評論。
- 102 乙竹 岩造 歐米近世教育史（師範大學講座7） 山海堂出版部 大、15、12
第6章第1節「作為教育説」及び同第2節「公民教育説」において、G. K. の所説に論及。
- 103 入澤 宗壽 教育者と教育精神 東洋圖書 昭、2、1
前篇「教育者論」の第3章「ケルシエンシュタイナーの教育論」において、G. K. の「公民教育論」、「作業學校論」、「品性陶冶論」、「心的態度論」及び「教育原則論」について論述。中篇「教育者の精神」は彼の著 Die Seele des Erziehers の翻訳（海後宗臣と共訳）。
- 104 岡田 龍生 文化教育學の原理と實際（教育思潮原理實際叢書（1）） 第一出版協會 昭、2、5
特に第2篇第6章「ケルシエンシュタイナーの教育學説」において、G. K. の「著書と其思想」、「文化教育學説」について約説。
- 105 岡 篤郎 最新實業補習教育の研究 東京實文館 昭、2、7
第20章「ケルシエンシュタイナーの公民教育」において、G. K. の公民教育の理論と實際に論及。
- 106 入澤 宗壽 文化教育學と文化科教授法（文化中心新教授學大系第15卷） 教育研究會 昭、2、7
随所で G. K. の所説に言及しているが、特に第1篇第7章「教育者の精神」において、彼の著 Die Seele des Erziehers の概要を紹介。
- 107 大日本學術協會 入澤宗壽氏教育學（日本現代教育學大系第4卷所収） モナス 昭、2、7
第8章第3節「教育方法としての體驗」において、G. K. を「家庭と學校とを作業團體として見、それに依る行動的、環境的、社會的方法を力説する」論者とし、彼の「作業學校の主張」及び「個性に即する方法」について紹介。
- 108 大日本學術協會 小林澄兄氏教育學（日本現代教育學大系第6卷所収） モナス 昭、2、9
第7章「勞作教育論」において、G. K. を「勞作主義の最も有力な主張者」とし、「勞作主義を以て唯一の教育的手段と認め、それによって教師と學生と文化財との勞作協同體（Arbeitsgemeinschaft）が形成されるものとし、その基礎の上に公民科が置かれることによつて、公民教育は完全にその目的を果し得るものと考えてゐる」と紹介。
- 109 入澤 宗壽 現代教育思想概説 山海堂出版部 昭、2、11
第1篇第4章「文化的教育思想」、第2篇第5章「訓練に関する問題」及び第6章「教授に関する問題」において、G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）の所説を紹介。
- 110 大日本學術協會 林博太郎氏教育學（日本現代教育學大系第8卷所収） モナス 昭、2、11
第2章第4節「教育の方法」において、G. K. は「勤勞學校は技能學校であり、活動學校である」という見解を「ベスタロッチの

教育と結合せしめて、ミュンヘン市の学校で実施した」が、「技能は知識の基」となり、また技能を通して「公民教育」にまで進むと評価。

- 111 入澤 宗壽 現代教育思潮 光文社 昭、2、12
特に第2章「価値哲学と価値教育学」及び第3章「文化哲学と文化教育学」において、G. K. の著 Theorie der Bildung (1926) の所説を紹介。
- 112 武田 勘治 古今東西五十大家教育説要論 モナス 昭、3、6
「ケルシエンシュタイナーの教育説」はI - 135を収載。
- 113 大日本学術協会 篠原助市氏教育学（日本現代教育学大系第12巻所収） モナス 昭、3、6
第2章第3節「経験主義と理想主義」において、G. K. の「教育思想は極めて多面的であるが、その一面は確に歴史学派に属する」として、彼の「陶冶の根本原理」に言及するとともに、第4章「教育の理想論」において、G. K. を「公民教育の有力なる代表学者」として、その概要を紹介、「公民教育と職業教育との連絡を期した」彼の説は「新見地を開拓したもの」と評価。
- 114 小川 正行 獨逸に於ける新教育 目黒書店 昭、3、7
第5章「作業学校 Arbeitsschule」において、G. K. を「現代獨逸教育学者中の最大の立物」として、彼の略歴と「教授の原理及び教科としての作業」説について紹介。
- 115 日田 権一 人格観的教育思想の進展 昭和出版社 昭、3、7
第5編第1章「陶冶作用の根本公理」はI - 115の再録。
- 116 武部 欽一 實業補習教育の本質（文部省構内實業補習教育研究会『實業補習教育の本質』所収）
文部省構内實業補習教育研究会 昭、3、7
第2の2「在來教育の缺點」及び第3「實業補習教育の意義」において、「現今補習学校が職業的の学校となつた」こと、また「公民教育と云ふもの、必要が唱へらるゝに至つた」ことはG. K. の「功績」「影響」によるところ「非常に大きい」として、彼の所説を詳述。
- 117 鈴木 定次 手工教育学原論 同文館 昭、3、10
G. K. を「世界須知の公民教育家、勤勞教育の大家にして、同氏の計畫になれる補習学校は著者の尊敬して止まぬ理想的のもの」として、随所で彼の「手工教育」に関する所説と実際に言及。
- 118 関 衛 圖畫教授の基本問題 モナス 昭、3、12
第10章「ケルシエンシュタイナーの圖畫能力研究」及び第12章「兒童學に基ける小學校の圖畫」において、兒童の図画能力の発達段階や図画教授の革新に関するG. K. の所論について詳論。
- 119 入澤 宗壽 歐米教育思想史（太古より現代まで） 教育研究会 昭、4、4
第9章第3節「ケルシエンシュタイナーの教育学説」において、G. K. を「公民教育と作業学校とを唱導して實際教育の革新に努力し、又近時價值を力説して陶冶の理論を眞に實際的に活用し得べく建設しつゝあるは注意すべき點である」と評価。
- 120 白土 千秋 精説勤勞教育 教育研究会 昭、4、4
前著『勤勞学校の意義及其經營法』（前掲19参照）の所論を、G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses 及び Theorie der Bildung によって改訂したもの。
- 121 竹井 彌七郎 勞作教育学の發達（最新教育研究叢書2） 最新教育研究会 昭、4、5
G. K. を「最も代表的な勞作学校論者」として、特に前篇第3章において彼の「勞作学校論の生成」、中篇第4章において「公民的勞作学校論」、後篇第12章において「文化哲學的勞作教育学」について詳論。
- 122 入澤 宗壽 現代教育哲学 目黒書店 昭、4、5
第4章「ディルタイ派の教育哲学」の第3節及び附録4「作業学校思想の進展」において、G. K. の教育説に言及。
- 123 篠原 助市 理論的教育学 教育研究会 昭、4、6
特に第2章第3節「一般的陶冶と職業的陶冶」、第8章「文化價值と教育の方法」及び第9章「方法上の原理」において、G. K. の所説を紹介、批判。
- 124 吉田 俊郎・織田 百郎 小學校に於ける實業的陶冶の新研究 同文館 昭、4、7
第3章「普通教育と職業的陶冶」において、G. K. の所説を紹介。
- 125 小川 正行 最近訓練原論 東洋圖書 昭、4、7
特に第2章「性格論」、第4章「訓練上に於ける權威と自由」及び第8章「訓練の手段」において、G. K. の晩年の思想を紹介。
- 126 武部 欽一 勤勞教育 隆文館 昭、4、7

- G. K. を「現今の獨逸教育學者中の大立物」とし、特に2の9「ケルシェンシュタイナーと勤勞學校」において、彼の勤勞教育説の概要を紹介。また、3「獨逸の勤勞教育」は彼の著 Begriff der Arbeitsschule の附録 Ein Organisationsbeispiel für städtische Volksschulklassen (3. Aufl., 1917 以降) の抄訳的介绍。
- 127 眞田 幸憲 實際教育主要問題の解決 南光社 昭、4、9
第12に「アルバイツシユールの發達變遷」(I - 132 参照) を収載。
- 128 村上 俊亮 陶冶論 (最新教育研究叢書3) 最新教育研究會 昭、4、9
G. K. の晩年の大著 Theorie der Bildung を中心に、他の主要著作をも参照しながら彼の陶冶思想を詳しく紹介。
- 129 吉田 熊次 陶冶と價值 目黒書店 昭、4、10
第1章「陶冶と價值」において、G. K. を「近時に於いて陶冶の問題を中心として教育學を體系づけようと試みたる者」とし、彼の「大著」Theorie der Bildung について紹介。「陶冶」の概念を中心としているが、「陶冶の概念其者は何んぞといふ問題に就いて學的反省を餘り多く費」さず、「寧ろ陶冶方面に關する所見を記述せるもの」で、「聊か遺憾とせざるを得ない」と批判。
- 130 吉田 熊次 教育史上に於ける勤勞作業の地位 (教育研究會編『勤勞教育の理論と實際』所収) 教育研究會 昭、4、11
G. K. の「勤勞教育」及び「勤勞作業」に關する所説に簡単に論及。
- 131 白土 千秋 勤勞の教育的價值 (同上) 教育研究會 昭、4、11
G. K. の「勤勞教育」説が「最も適切に……時弊を匡救するに割當する」とし、彼の所説に依拠して「勤勞の教育的價值」を解明。
- 132 龍山 義亮 教育制度上に於ける勤勞教育 (同上) 教育研究會 昭、4、11
G. K. の「勤勞教育思想」とその業績について簡単に紹介。
- 133 武部 欽一 勤勞教育の諸説と勤勞學校の組織 (同上) 教育研究會 昭、4、11
G. K. の著 Grundfragen der Schulorganisation を中心にして、彼の「勤勞學校」論とその組織の概要を紹介。
- 134 竹井 彌七郎 勞作學校論に於ける勞作の概念 (同上) 教育研究會 昭、4、11
G. K. を「勞作學校論の最大の代表者」とし、彼の「勞作の概念」に簡単に論及。
- 135 松本 喜一 公民科と勤勞教育 (同上) 教育研究會 昭、4、11
G. K. を「勤勞主義の教育を取り入れて公民科教の大成を企圖し之れを實地に摘要したる者の始め」とし、彼の勤勞教育説とその「公民科」に対する効果について評論。
- 136 野田 義夫 現代教育概観 人文書房 昭、4、11
特に第4章「作業主義の今昔」において、G. K. を「作業主義の新説を高唱」した「教育刷新の急先鋒」とし、彼の教育史的功績と「作業主義の主張」、「職業教育と公民教育との要素」について論述。
- 137 北澤 種一 作業教育序説 目黒書店 昭、4、11
特に4「作業教育思想の歴史的発展」、6「作業教育の理論的基礎」及び7「作業の陶冶的價值」において、G. K. の「作業主義」について評論。
- 138 関 衛 圖畫の教育 厚生閣 昭、4、12
随所で G. K. の児童の図画能力に關する研究結果を紹介。
- 139 岡 篤郎 實業補習教育概論 東洋圖書 昭、4、12
「最近に於ける實業補習教育の發達は」G. K. の「力に俟つ所が頗る多い」とし、彼の肖像と「小傳」を巻頭に掲載。
- 140 北澤 種一 作業教育の原理 (北澤種一編『現代作業教育』所収) 東洋圖書 昭、5、3
G. K. を「最近に於けるドイツの作業教育に魁をなした人」とし、特に8「勞得の原理」において、彼の「文化哲學の立脚地より」論じた「作業學校」論を紹介、批評。
- 141 澁谷 義夫 作業學校主義と修身教授 (同上) 東洋圖書 昭、5、3
G. K. を「作業團體を基礎として利己心を利他心にまで導くのが道德教育公民教育の主要な方法として居る」として、彼の「共同作業」と「道德教育」との關係説に言及、批評。
- 142 佐藤 熊治郎 自發性の原理の展開 目黒書店 昭、5、5
特に第14章「ケルシェンシ (ママ) タイナー (Georg Kerschensteiner) の勤勞學校」において、G. K. を「現在存命する教育者中最も勝れた先覺者」とし、彼の「自發性の原理たる勤勞學校」論を紹介、「極めて實際的な穩健中正の立場を示してをる」と評価。
- 143 関口 泰 公民教育の話 (第二朝日常識講座第9巻) 朝日新聞社 昭、5、6
第5章第1節「社會への教育」において、G. K. を「現代のベスタロッツ」とし、彼の「社會的教育と作業學校」に關する所説を

紹介。

- 144 野田 義夫 文化教育學原論 人文書房 昭、5、6
特に第1章「緒論」及び第3章「スプリング」において、G. K. を文化教育学の「實際教育學派」に位置づけ、彼とシュプリング（Eduard Spranger, 1882-1963）との影響関係にも論及。
- 145 黒川 恵寛 獨逸「學校改革」の精神 玉川學園出版部 昭、5、8
9「作業學校」（Arbeitsschule）において、「作業學校の意義は」G. K. によって「明瞭にせられ、且、その必要が唱導せられた」として、彼の作業學校論を簡単に紹介。
- 146 山口縣女子師範學校附属小學校（代表者 津田昌業） 勤勞教育の原理と實際
山口縣女子師範學校附属小學校 昭、5、9
第1篇「勤勞教育の原理」において、主としてG. K. の著 Begriff der Arbeitsschule (7. Aufl., 1928) に依拠して、自校の勤勞教育の原理と實際について体系的に論述。
- 147 大日本學術協會 勞作教育思潮大觀 モナス 昭、5、10
I - 156 を単行本として出版したもの。
- 148 小西 重直 勞作教育 玉川學園出版部 昭、5、10
第2章2の（2）「デューイとケルシェンシュタイナー」において、デューイ（John Dewey, 1859-1952）とともに、G. K. の「勞作教育」思想を簡単に紹介、評論。
- 149 松月 秀雄・東尾 眞三郎 手長足長個性教育膝栗毛 日東書院 昭、5、11
前篇「獨逸」は「ミュンヘン市リープヘア街中央補習學校」參觀記、G. K. の訪問記並びに「ケルシェンシュタイナー教授の思出」（I - 157 参照）を含む。
- 150 會田 慶司 現代教育思潮概説 啓文社 昭、5、11
特に第3章第4節1、「ケルシェンシュタイナーの教育説」において、G. K. の「略傳」と「教育説概要」を紹介、批評。
- 151 和歌山縣師範學校附属小學校 吾が校の勞作教育 明治圖書 昭、5、12
特に第1編第2章第2節「ケルシェンシ（ママ）タイナーと私共の作爲勞作による教育」において、G. K. の「勞作教育」論を紹介、批評。
- 152 文部省調査部 國民學校ト補習學校（文部省調査部編『内外教育制度ノ調査』第2輯所収）
文部省 昭、6、4
1929年11月8日ベルリンで開かれた Arbeitsausschuß für Berufsausbildung の総会におけるG. K. の講演 Das zweifache Problem der Volks-und Berufsschule の要点を紹介。
- 153 文部省調査部 學校生活化の問題 ケルシェンスタイナー（同上） 文部省 昭、6、4
G. K. の論文 Das Problem der Lebensnähe unserer Schulen (Die Erziehung, 5. Jg., 1930 所収) の翻訳。
- 154 村上 俊亮 陶冶の基本問題（現代教育問題精選第3冊） 目黒書店 昭、6、4
G. K. の著 Theorie der Bildung を、彼の「思想的轉換の成果」であり、かつ、彼の「最近の教育思想を知るのに唯一の手引」であるとして、その大綱を「陶冶の理念」と「陶冶方法の一般原理」とに分けて詳述。
- 155 入澤 宗壽 最近教育の思潮と實際 明治圖書 昭、6、6
第1章第6節「作業學校思想と實驗學校」において、G. K. の作業學校論とミュンヘンの實驗學校について簡単に論述。
- 156 北澤 種一 現代作業教育の諸問題 明治圖書 昭、6、6
特に第1編第4章「作業學校の企圖と目標」及び第12章「作業教育と教科課程」において、G. K. の「妥協的作業主義教育ともいふべき作業學校の概念」について紹介、批判。
- 157 北野 駿 公民教育の概念 モナス 昭、6、7
G. K. の著 Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung (6. Aufl., 1929) の翻訳。なお、巻頭に北澤 種一「ケルシェンシュタイナ（ママ）教授の印象（序文にかへて）」を掲載。
- 158 梯 英雄 作業主義の教育 教育研究會 昭、6、8
特に第3章第2節「狹義の作業教育」及び第4節「文化教育と作業主義」において、G. K. の作業教育論を紹介、批評。
- 159 大槻 正一 ケルシェンスタイナーの國民教育と教育者本質論 明治圖書 昭、6、9
「序論」において、G. K. の「略傳及び著書」と「獨特の意義」について詳論。「本論」は彼の著 Grundfragen der Schulorganisation と Die Seele des Erziehers の抄訳的紹介（I - 104・109・110・118 参照）。

- 160 水戸部 寅松 輓近歐米國民教育詳説 厚生閣 昭、6、9
第3「獨逸の教育」の（8）「實業補習學校」はI - 158に加筆したもの。また、(12)「作業主義の教育」においても、G. K. の「勤勞の意義の解釋」に簡単に言及。
- 161 入澤 宗壽 現代教育思潮大觀 同文書院 昭、6、10
特に第4章「作業教育」、第5章「價值教育學」及び第10章「公民教育」において、G. K. の当該教育論について紹介。なお、附録1にI - 131を収載。
- 162 野田 義夫 勞作教育の回顧と展望（廣島高等師範學校附属小學校學校教育編輯部編『勞作と教育』所収）
寶文館 昭、6、10
I - 174 参照。
- 163 松月 秀雄 批判的人格主義と勞作教育の原理（同上） 寶文館 昭、6、10
I - 175 参照。
- 164 守内 喜一郎 勞作の教育學的概念（同上） 寶文館 昭、6、10
I - 177 参照。
- 165 下川 履信 作業學校の理論と實際 教育研究會 昭、6、12
G. K. の著 Begriff der Arbeitsschule (6. Aufl., 1925) の翻訳。なお、巻頭に彼の訳者宛書簡を収載。
- 166 澁谷 義夫 作業教育概論 文化書房 昭、7、1
特に第6章第2節「ケルシエンシュタイナーの教育思想」において、ファンゼロウ（Max Vanselow）の著 Kulturpädagogik und Sozialpädagogik bei Kerschensteiner, Spranger und Litt (1927) の叙述に従って、G. K. の教育思想について詳論。
- 167 三浦 喜雄 新勞作教育の原理と實際 人文書房 昭、7、1
第1篇第1章第3節「人間活動の種類と教育」、第2章第1節「教育の實際的傾向としての勞作教育思想」及び第3篇第1章第1節「ケルシエンシュタイナー及びデューキの思想」において、G. K. の「勞作教育」論に言及。
- 168 渡部 政盛 最新西洋教育史講義 大同館 昭、7、2
第5編第1章第4節「國家公民的教育」において、G. K. を「國家公民主義的教育」の代表者とし、彼の略伝と所説を簡単に紹介。
- 169 佐藤 熊治郎 國民教育の中心問題（其の一 公民教育） 目黒書店 昭、7、2
随所でG. K. の「公民教育」及び「補習教育」論に簡単に論及。
- 170 佐藤 熊治郎 國民教育の中心問題（其の二） 目黒書店 昭、7、2
主に第1篇第4章「勤勞教育の標的となる人格」において、G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses に依拠して、「個性が陶冶の基礎となり出發點」となり、かつ「多方的に價值を體驗し得る人格」の「中心點」となることを指摘。
- 171 槇山 榮次 教授法思想の變遷 目黒書店 昭、7、3
第5章「作業主義の思想」において、G. K. の「作業學校」説を他の論者の所説と比較、検討。なお、附録の第4「實際生活への連絡を主義とする教育」はI - 166の再録。
- 172 原 房孝 公民科教育の本質とその教授法概説 目黒書店 昭、7、5
特に第1章「公民教育の意義」において、彼の所説の概要を紹介、批評。
- 173 野田 義夫 勞作教育原論 明治圖書 昭、7、6
G. K. を「現代勞作教育の代表者」とし、特に第1章第2節「勞作學校の提唱と其の普及及び發達」と第4章第6節「社會本位派」において、彼の「勞作學校」論と「公民教育」論について詳述。
- 174 乙竹 岩造 教育學（師範大學講座 倫理・教育・心理の部 第4巻） 建文館 昭、7、7
特に第4篇「陶冶論」において、G. K. を「人間の生活機能を發生的に眺め……これを陶冶の理論の出發點として論究したる最近の代表者」とし、彼の晩年の大著 Theorie der Bildung に基づき、彼の「陶冶の原理」について詳論。
- 175 入澤 宗壽 現代的教育學（同上、第5巻） 建文館 昭、7、7
第2章第4節「ケルシエンシュタイナーの教育學」において、G. K. の「公民教育」「作業教育」「文化教育」及び「教育者論」について詳論。
- 176 佐藤 武 現代教育教授思潮大觀 日本教育學會 昭、7、9
G. K. を「現代に於ける勤勞教育運動の代表者」とし、特に第1章第3節「勤勞教育學」及び第2章第2節「勞作教育」において、彼の主張を概説。
- 177 松月 秀雄 現代の哲學的教育學的潮流 モナス 昭、7、11

- 第5篇「文化教育學—文化哲學と現象學」において、モーク（Willy Moog, 1888-1935）及びシュブランガーの見た「文化教育學者としてのケルシェンシュタイナー」について紹介。
- 178 小林 澄兄 勞作教育學（岩波講座『教育科學』第17冊所収） 岩波書店 昭、8、2
特に3「勞作の意義（1）」において、G. K. の「眞的教育的勞作」の概念に論及。
- 179 竹井 彌七郎 作業學校（同上） 岩波書店 昭、8、2
第1章「ドイツに於ける作業學校問題」及び第3章「ミュンヘン市に於ける作業學校」において、G. K. の「作業學校論」とその実際について詳しく紹介。
- 180 松田 友吉 現代教育新思潮の認識と批判 大同館 昭、8、3
第1篇第5章「社會的教育思想」及び第2篇第4章「教育實際上の新主張」において、G. K. の「公民的社會教育説」と「作業教育」説に言及、批判。
- 181 梅根 悟 勞作教育論（大日本學術協會編『現今八大教育思潮』所収） モナス 昭、8、6
特に第3章「方法原理としての『勞作』」において、G. K. の「後年の理論的に深化せる勞作教育論」、すなわち「客觀主義的勞作教育論」について詳説、批評。
- 182 山極 眞衛 教育理論の實際化（同上） モナス 昭、8、6
G. K. を「偉大なる教育實際家、行政家であり、同時に優れた教育理論家」ととし、特に第3章「教育の本質と教育者」において、G. K. の著 *Die Seele des Erziehers* の大要を紹介、批評。
- 183 梅根 悟 勞作教育新論 成美堂 昭、8、12
特に4「陶冶方法としての『勞作』」において、主に彼の著 *Begriff der Arbeitsschule* (6. Aufl., 1925) と *Grundfragen der Schulorganisation* (5. Aufl., 1927) に拠りながら、G. K. の生涯にわたる「勞作教育論」の發展について詳論。なお、附録2にI-211を再録。
- 184 三浦 喜雄 實際的勞作教育原論 新生閣 昭、8、12
特に第2章第1節「教育の實際的傾向としての勞作教育思想（狹義的勞作教育）」において、G. K. の「主張」について簡単に紹介。
- 185 秋葉 貞二 ケルシェンシュタイナーの教育思想（玉川文庫45） 玉川學園出版部 昭、9、2
G. K. の「教育思想展開の時期」を大きく「初期（1899-1913）」「中期（1913-1926）」「後期（1926-1932）」の三期に分け、各時期の教育論について詳述。
- 186 小林 澄兄 最近教育思潮概説 明治圖書 昭、9、2
特に第11章第6節「社會化の教育思想と運動」において、G. K. の「公民教育」論を紹介、批判。
- 187 西村 精一 獨逸青年の公民教育 内外出版 昭、9、3
G. K. の著 *Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend* (10. Aufl., 1931) の翻訳。
- 188 乙竹 岩造 現代教育學汎論 培風館 昭、9、3
第1篇第7章「文化的教育學説」、第2篇第2章「勤勞學校問題」及び第3章「公民教育問題」において、G. K. の当該教育學説について詳論、批評。
- 189 小林 澄兄 勞作教育思想史 丸善 昭、9、4
附録に「勞作教育學」（前掲171参照）を収録。
- 190 三浦 喜雄 人間學と勞作教育の實踐 新生閣書店 昭、9、5
附録「ケルシェンシュタイネル研究」において、G. K. を「公民教育、勞作學校の主唱と實踐」者及び大著『陶冶の理論』の「大成」者とし、彼の当該教育説について紹介、論評。
- 191 長田 新 ペスタロッチー教育學 岩波書店 昭、9、6
特に第10章4「勞作教育」において、G. K. を「現代においてペスタロッチーが勞作の原理を繼承し・發展し・基礎付け且つ弘布した第一人者」と評価し、彼の主張を簡単に紹介。
- 192 文部省實業學務局 獨逸の職業學校前篇 文部省實業學務局 昭、9、6
第3篇「青年期の職業教育」はG. K. の1922年の論文 *Berufserziehung im Jugendalter* (In: *Handbuch für das Berufs- und Fachschulwesen*, hrsg. von A. Kühne, Leipzig o.j.) の翻訳。
- 193 佐々木 清之丞 西洋教育史新講 三友社 昭、10、2
第1編第8章第2節「公民教育説」、同第4節「作業學校」及び第3編第5章「19、20世紀の教育家」において、G. K. の所説と略歴に簡単に言及。

- 194 入澤 宗壽 世界に於ける新教育の趨勢（新教育叢書第2編） 同文館 昭、10、6
特に第1章第4節「社会公民の教育」及び同第7節「作業学校運動」において、G. K. の教育説に論及。また、巻頭に「ディルタイ派の思想家」の一人として彼の肖像を掲載。
- 195 小川 正行 勞作教育論及教授法 目黒書店 昭、10、10
特に第2篇第4章「勞作教育論上に於けるケルシェンシュタイナーとのガウヂ（ママ）ッヒの對立」、第7章「獨立教科としての勞作」、第8章「勞作の教育的價值論」及び第11章「勞作原理の實行に關聯ある諸要求」において、G. K. の勞作教育論の發展について詳述。
- 196 原 房孝 公民科概説（師範大學講座「修身倫理」第6巻） 建文館 昭、10、11
特に第2章「公民教育の意義」において、G. K. の論説を「歐洲大戰以前に於けるドイツの公民教育思想を代表するもの」として、その「特色」及び「公民教育と國民教育との關係」に關する彼の主張に論及。
- 197 眞田 幸憲 農村の郷土・勞作・公民教育 東洋圖書 昭、11、1
第2章第2節「勞作の教育的意義」において、G. K. の「公民的實業的陶冶としての勞作」及び「教育的勞作」の概念について紹介。
- 198 文部省教育調査部 獨逸に於ける統一學校思想（『教育制度の調査』第7輯所収） 文部省教育調査部 昭、11、3
第1章4、「ケルシェンスタイナー（Kerschensteiner）の統一學校論」において、G. K. の当該學説を簡単に紹介。
- 199 文部省教育調査部 最近に於ける精神發達段階に關する諸學説（同上） 文部省教育調査部 昭、11、3
3、「ケルシェンスタイナー（Kerschensteiner）の精神發達段階説」において、G. K. の著 Theorie der Bildung に基づき、精神發達の4段階説について紹介。
- 200 大瀬 甚太郎 西洋近世教育史（現代教育學大系原論篇第5巻） 成美堂 昭、11、4
第11章第3節「勞作主義の社會的見地」及び第12章第3節「ゲオルグ（ママ）・ケルセンシュタイナーの公民教育論」において、G. K. の勞作及び公民教育論に言及。
- 201 佐々木 秀一・白根 孝之 最近ドイツ教育思想史 中和書院 昭、11、6
特に第2篇第8章「作業主義」及び第3篇第10章「社会への教育」において、G. K. を「ドイツ否世界に於ける作業主義教育學の中心的代表者」及び「ドイツに於ける公民教育の創唱者」として紹介、彼の所論を約説。
- 202 山田 榮 陶冶理想學（現代教育學大系原論篇第9巻） 成美堂 昭、11、6
G. K. の著 Theorie der Bildung を「教育を語る者にして對して暗示するところが頗る多い」として各所に引用、特に第1章「序説—問題と態度」の（註2）において、その概要を紹介。
- 203 篠原 助市 理科教授原論 東洋圖書 昭、11、9
随所で G. K. の著 Wesen und Wert des naturwissenschaftlichen Unterrichtes (3. Aufl., 1928) における所論を引用。
- 204 小林 澄兄 勞作教育論（現代教育學大系各科篇第19巻） 成美堂 昭、11、12
特に第1章「勞作教育の意義」及び第5章「教育上の方法的原理と勞作教育」において、「諸家の勞作觀がある中に」G. K. のそれを「最も代表的なもの」とし、彼の著 Theorie der Bildung の所説を詳しく紹介、評論。
- 205 入澤 宗壽 教育通論 中和會事務所 昭、12、8
前篇第2章第6節の2「デューキ及びケルシェンシュタイナーの教育學説」において、G. K. の略歴と學説に簡単に言及。
- 206 長田 新 最近の教育哲學 岩波書店 昭、13、4
第5章第2節「精神科學的教育學と形而上學」において、G. K. を「精神科學的教育學の一代代表」として、「精神科學的教育學が形而上學的基礎なしに不可能なこと」を説いたことに言及するとともに、第7章第5節「教育活動の本質」において、彼が「陶冶の個性化」と、「客觀的一般陶冶」に對する「主觀的一般陶冶」を主張したことを強調。
- 207 守内 喜一郎 現代教育思潮統一の研究 目黒書店 昭、13、9
特に第3章第2節「勞作の教育的概念」及び第3節「兒童勞作の具體的考察」において、G. K. を「勞作學校の代表者」の一人として、彼の「勞作教育」に關する所説を概説。
- 208 篠原 助市 教育斷想—民族と教育其の他 寶文館 昭、13、7
第2部「ケルシェンシュタイナーの教育思想」はI—204の再録。
- 209 山極 眞衛 現代學校教育學 賢文館 昭、13、10
前篇第1章「教育の意義及び本質」と第2章「教育の目的」において、G. K. の「陶冶過程の根本公理」と「陶冶の徵表」及び「公

民教育思想」について論述。

- 210 山田 榮 現代教育方法論—直観・労作・郷土・合科・生活 成美堂 昭、14、2
「現今の労作教育」の2「現代労作教育思潮の概観及び批評」、3「労作教育の意味」において、G. K. をデューイとともに「現今の労作教育の開拓者」として、彼の労作教育論を詳説、批評。
- 211 乙竹 岩造 日本教育學の樞軸 目黒書店 昭、14、10
第2篇第4章「文化教育學の陣營とその驍將」において、G. K. を「文化教育學の今一人の大立物」とし、彼の「教育學的中心問題は、有名な陶冶の理論に於て、その研究の頂上に達してゐる」と評価して、陶冶の理論について詳論。また、同第9章「國家主義教育學の新擡頭とその展望」において、最近の教育界の「一大基調」として「國家主義教育學の眞に眼ざましい勃興」を挙げ、G. K. を「その主たる代表者」に「先づ挙げらるべき」とし、彼の「國家公民教育」説に論及。
- 212 篠原 助市 教授原論—特に國民學校の授業 岩波書店 昭、17、1
随所でG. K. の所説に言及しているが、第3章第3節「教材の選擇」において、彼の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses によりながら、教材選擇の原理を紹介、批判。また、第6章第1節「認識の發展」において、彼の著 Wesen und Wert des naturwissenschaftlichen Unterrichtes、第8章第4節「各種の表現」において、彼の著 Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung の所説の要点を紹介。
- 213 藤原 喜代藏 明治大正昭和思想學說人物史（第3巻大正年代篇） 東亜政経社 昭、18、11
特に第4章第2節の3「國家的公民教育の思想」において、G. K. を「公民教育の體系的な提唱者」とし、彼の当該學説を紹介、論評。
- 214 篠原 助市 獨逸教育思想史（下） 創元社 昭、22、11
第8章「20世紀（1930年に至る）に於ける教育思想の發展」において、G. K. の「公民教育説」（第1部第2節3）、「陶冶論」（同第4節5）、「教育者の類型」（第2部第8節2）、「作業學校論」（第3部第10節2、3、5）及び「性格論」（同第12節4）について詳論。
- 215 小林 澄兄 労作教育新論 玉川大學出版部 昭、23、10
前掲197参照。
- 216 山極 眞衛 新學校教育學序説 三省堂 昭、23、11
第2章第4節の3「改革教育學—陶冶教育學の諸潮流」において、G. K. の「作業學校の概念」及び「陶冶論—個性的、價值的形成」について詳説。
- 217 梅根 悟 初等理科教授の革新 誠文堂新光社 昭、23、12
特に第7章第2節「ケルシェンシュタイナー」において、G. K. の「労作教育」論を「少なくともその發端においては理科教授の方法の問題から出發し、それを中心として發展し來たつたもの」とし、彼の労作教育論及びその原理に基づく理科教授思想と実践について詳説。
- 218 安藤 堯雄 教育制度提要 三省堂 昭、24、5
第1編第1章「教育制度學の系譜」において、G. K. を「教育學者として、教育制度學を建設しているもの」の一人として挙げ、特に彼の遺著 Theorie der Bildungsorganisation (1933) の梗概を紹介。
- 219 山本 晴雄 世界の教育哲學 原書房 昭、24、6
第1章第6節「ケルシェンシュタイナーの公民主義教育理念」において、G. K. が公民教育思想を説くに至つた「背景」とその「教育理念」について論述。また、彼の「略傳」を紹介。
- 220 乙竹 岩造 近世教育史 培風館 昭、25、1
第3編第1章第10節「陶冶教育學」、同第2章第1節「勤勞學校問題」及び第2節「公民科と社會科」において、G. K. の当該所説を略述。
- 221 山田 榮 現代教育の基調（教育大學講座第1巻『教育原理』所収） 金子書房 昭、25、5
3「教育の方法」において、G. K. の著 Theorie der Bildung に拠りながら、彼の「自己活動」の種類及び「自己活動と生活」に関する所説に論及。
- 222 篠原 助市 歐洲教育思想史（下） 創元社 昭、25、6
前掲205の改題増補版。
- 223 山田 榮 近代的教育方法の發達（教育大學講座第15巻『教育方法論』所収） 金子書房 昭、25、7
特に3「労作教育の發達」において、G. K. を「現代の主なる労作教育論者」の一人として、彼の「労作教育思想」の概要とその

- 「変遷」について紹介。
- 224 篠原 助市 訓練原論 寶文館 昭、28、8
第4章第2節「作業」において、G. K. を「手業と作業共同体を重んじた」「作業学校の主張者」とし、両者の道徳的性格の発展に対する教育的意義を力説。
- 225 岩崎 喜一 ドイツの新教育運動（教育大学講座第4巻『西洋教育史』所収） 金子書房 昭、25、11
第2章第2節「労作（作業）学校運動」及び同第3節「道徳的自己活動と学校形態」において、G. K. の「労作学校思想」に簡単に論及。
- 226 川合 章 欧州の教育思想家（19－20世紀）（教育大学講座第4巻『西洋教育史』所収）
金子書房 昭、25、11
G. K. を「公民教育の主張者」「労作教育の推進者」として、彼の経歴と思想を紹介。
- 227 梅根 悟 日本の新教育運動—大正期新学校についての若干ノート—（教育大学講座第3巻『日本教育史』所収）
金子書房 昭、26、6
5「『教育思想』時代と新学校」において、G. K. を中心とする「労作教育思想」の日本における受容について簡単に論述。
- 228 相沢 熙 日本教育百年史談 学芸図書出版 昭、27、6
第3期第23章「2」「教育思想の研究と実際教育に対する影響」において、G. K. の「公民教育論・作業教育論」の我が国の実際教育への影響に論及。
- 229 篠原 助市 教授原論—学習輔導の原理と方法— 玉川学園大学出版部 昭、28、6
前掲203の改訂版。
- 230 石井 正司 ケルシエンシュタイナー『作業学校概念』（教育科学入門叢書（7）『教育方法論』所収）
誠文社新光社 昭、30、12
G. K. の「略歴と著書」及び彼の著 Begriff der Arbeitsschule（6. Aufl., 1925）の「構成と内容」について概説し、併せてこの書の「影響と批判」にも論及。
- 231 篠原 助市 欧州教育思想史（下） 相模書房出版部 昭、31、4
前掲213の復刊。
- 232 篠原 助市 教育生活五十年 相模書房出版部 昭、31、12
特に第1部第5章17「アルバイツシューレ問題」において、I－11の概略について説明。
- 233 玉井 成光 教育者の心—その本質の構造— 協同出版 昭、32、9
G. K. の著 Die Seele des Erziehers（5. Aufl., 1952）の翻訳。
- 234 石井 正司 欧米における産業技術教育の発達—ドイツ（生活科学調査会編『産業技術教育講座1歴史的背景』所収）
医薬出版 昭、33、1
「帝国主義の産業技術教育の性格—ケルシエンシュタイネル教育理論の形成」において、G. K. の「公民教育」論や「作業学校」論が19世紀末から20世紀初頭にかけて果たした歴史的、客観的役割について考察、批判。
- 235 渋谷 義夫 勤労作業教育とケルシエンシュタイナー（上） 三重大学学芸学部教育研究所 昭、33、4
第2編「ケルシエンシュタイナーの教育学」は、ファンゼロウの著 Kulturpädagogik und Sozialpädagogik bei Kerschensteiner, Spranger und Litt（1927）に基づき、G. K. の教育思想について論評。第3編「ケルシエンシュタイナーの研究」において、彼の自伝 Selbstdarstellung（1926）に拠りながら、彼の「生いたち」からミュンヘン市視学官時代の活躍並びに晩年の陶冶理論まで詳述。第4編「ケルシエンシュタイナーの陶冶過程の基本公理」は彼の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses（7. Aufl., 1931）の翻訳。
- 236 芝野 庄太郎 教育方法の原理（教育学テキスト講座第7巻『教育方法学』所収）
御茶の水書房 昭、33、5
第1章第3節「ケルシエンシュタイナーの労作及び生活」において、G. K. の所説に簡単に言及。
- 237 ケルシエンシュタイナー（生活科学調査会編『産業技術教育講座6世界の展望』所収）
医薬出版 昭、33、11
「人名解説」において、G. K. が「産業技術教育の分野で……なした大きな仕事はミュンヘンの補習学校の改革である」とし、彼の補習学校改革の意義と限界について論述。
- 238 渋谷 義夫 勤労作業教育とケルシエンシュタイナー（下） 三重大学学芸学部教育研究所 昭、33、12

- 第5編「陶冶の理論」はG. K. の著 Theorie der Bildung の Erstes Buch: Bildung als Zustand の翻訳。
- 239 小林 澄兄 西洋教育史概説 国土社 昭、35、6
第13章「新教育運動」において、ブレットナー（Fritz Blättner, 1891-1981）の著 Geschichte der Pädagogik（1953）に依拠して、G. K. の「労作学校」及び「公民教育」思想を紹介。
- 240 皇 志道 西洋教育通史 玉川大学出版部 昭、37、6
第3章第6節「精神科学的教育学」において、G. K. の真面目を「公民教育、労作教育の指導者」に認め、彼の生涯と思想に簡単に言及。
- 241 柳 久雄 生活と労働の教育思想史 御茶の水書房 昭、37、9
第7章第1節2「ケルシェンシュタイナーの資本主義的労作学校」において、G. K. の国家観及び教育観を「帝国主義」や「資本制国家」に奉仕するものとし、その「社会的反動性」を批判。
- 242 田花 為雄 ガウディヒ派教育学 新思潮社 昭、37、10
特に第1編第1章第6節「ガウディヒ派の発生と消長」において、1911年10月ドレスデンで開かれた Erster Deutscher Kongreß für Jugendbildung und Jugendkunde における G. K. とガウディヒとの「歴史的な作業学校論争」について紹介。
- 243 安藤 堯雄 教育制度学総論 葵書房 昭、38、4
前掲209参照。
- 244 小林 澄兄・東岸 克好 労作学校概念（世界教育宝典20） 玉川大学出版部 昭、40、7
G. K. の著 Begriff der Arbeitsschule（11. Aufl., 1955）の翻訳（東岸克好訳）。解説「ケルシェンシュタイナーの略伝と思想」（小林澄兄）は、彼の教育思想の発展について詳論。巻末に「わが国におけるケルシェンシュタイナーに関する主な文献」を収録。
- 245 三枝 孝弘 東ドイツにおける改革教育学の評価とその克服過程（中野光・三枝孝弘・深谷昌志・藤沢法暎『戦後ドイツ教育史』所収） 御茶の水書房 昭、41、12
I - 255に加筆したもの。
- 246 高野 兼吉 授業形態—その基本形と混合形 明治図書 昭、45、3
特にIIの5の（B）「陶冶をめざす原理」において、G. K. の「教育原理体系」として7原理を挙げ、各原理について簡単に説明。
- 247 篠原 助市 批判的教育学の問題（世界教育学選集55） 明治図書 昭、45、10
前掲57の再刊。
- 248 高野 兼吉 ケルシェンシュタイネルの理論（ペリかん・エッセンス・シリーズ⑥『現代教育理論のエッセンス』所収） ペリかん社 昭、45、10
G. K. を「現代教育界の一異彩」とし、彼の初期の「実証的」立場から「理想主義的転向」に至る経緯並びにそれ以後の陶冶論に重点を置き、彼の教育学説を詳論。
- 249 藤沢 法暎 労働学校論（世界教育学選集58） 明治図書 昭、46、2
G. K. の1908年の有名な講演 Die Schule der Zukunft eine Arbeitsschule（Grundfragen der Schulorganisation, 3. Aufl., 1912所収）と彼の著 Begriff der Arbeitsschule（8. Aufl., 1930）の翻訳。なお、解説の2「ケルシェンシュタイナーの公民教育説」はI - 257を一部省略して収録。
- 250 堀尾 輝久 現代教育の思想と構造—国民の教育権と教育の自由の確立のために— 岩波書店 昭、46、2
第1部第2章3「教育目的の変化—公民教育の登場とその意義を中心に—」において、G. K. を19世紀70年代以降の「時代の問題を代表するイデオログの一人」として、彼の「公民教育思想」を紹介、批判。
- 251 平松 秋夫 明治中期・後期における教授法研究の発達（伊藤仙太郎編『わが国の義務教育における教育方法の歴史的研究』所収） 風間書房 昭、47、3
第2編第2章第2節第10項「労作主義」において、G. K. の「狭義の労作学校の主張」が我が国の教育界に及ぼした影響について簡単に論述。
- 252 中島 半次郎 教育思潮大観（教育の名著3） 玉川大学出版部 昭、47、9
前掲49の復刊。
- 253 篠原 助市 欧洲教育思想史（教育の名著12） 玉川大学出版部 昭、47、11
前掲213及び222の復刻版。
- 254 高木 健次郎 教育改革と市民社会 成文社 昭、47、11
特にIIの13・10「ケルシェンシュタイナー」において、G. K. を「職業教育の卓抜な理論家かつ実践家」、イデオログとしては

- 「社会改良主義者」と規定、彼の職業教育の理念と職業教育学校制度の改革が果たした役割について簡単に論述。
- 255 山田 栄 近代欧米教育方法小史—世界観的視野からの探究—（山田栄選集2） 協同出版 昭、48、6
前掲 214 参照。
- 256 東岸 克好 ケルシェンシュタイナー（Kershensteiner, Georg. 1854～1932）（杉谷雅文編『現代のドイツ教育哲学』所収） 玉川大学出版部 昭、49、3
「ケルシェンシュタイナーといえば、誰しもただちに労作教育を想起することであろう」として、G. K. の労作教育論の解明を中心に、「公民教育論」や「性格形成論」にも言及。
- 257 平松 秋夫 明治時代における小学校教授法の研究 理想社 昭、50、4
第4篇第3章第9節「労作主義」において、G. K. を「労作学校の最初の主張者であり、わが国の教育界に最も大きな影響を与えた人」とし、彼の思想や実践が明治末期にどのように紹介され、どのような「足跡」を残し、またどんな批判・反対を受けたかについて究明。
- 258 大谷 光長 ケルシェンシュタイナー教育学序説—その根本問題と現代的意義— 法律文化社 昭、51、3
G. K. の教育思想を「公民教育論・労作教育論・性格教育論の三者の内的必然的關係」の中で捉え、この三教育論の検討を通して彼の教育思想を組織的、全体的に解明。併せてその現代的意義も考察。
- 259 松岡 信義 シュプランガーとケルシェンシュタイナー—ドイツ教育思想研究への一視点—（海外名著選73『ドイツ教育史—就学義務制への歩み—』所収） 明治図書 昭、52、2
シュプランガーとG. K. が両者の思想形成・深化の過程でいかに影響し合ってきたかについて詳論。
- 260 佐藤 熊治郎 自発性の原理の展開（教育の名著15） 玉川大学出版部 昭、49、3
前提 136 の復刻版。
- 261 梅根 悟 労作教育新論・現代訓育論（梅根悟教育著作選集第1巻） 明治図書 昭、52、5
「労作教育新論」については、前掲 176 参照。
- 262 梅根 悟 初等理科教授の革新（梅根悟教育著作選集第5巻） 明治図書 昭、52、10
前提 207 の復刻版。
- 263 藤沢 法暎 現代ドイツ政治教育史 新評論 昭、53、6
第1章「ドイツ公民教育の思想構造—ケルシェンシュタイナーを中心に—」において、I - 257 を収録。
- 264 長尾 十三二 西洋教育史 東京大学出版会 昭、53、6
「人名解説」において、G. K. の略歴と思想の特質について論述。特に、「理論的才能をもって生まれた者と、実際の才能をもって生まれた者とを区別し、後者を有能忠実な被治者大衆たらしめようとする彼の発想」を「大衆に道徳を与えて知識を阻もうとする立場」であるとして批判。
- 265 山崎 高哉 わが国におけるケルシェンシュタイナー紹介と受容—大正期を中心に—（池田進・本山幸彦編『大正の教育』所収） 第一法規 昭、53、9
G. K. の思想と実践が我が国においてどのように紹介、受容され、その結果我が国の教育にどのような影響を及ぼしたかについて、大正期を中心に考察。
- 266 東岸 克好 ペスタロッチの直観教育思想の研究 建帛社 昭、55、3
第6章の3「ケルシェンシュタイナーとペスタロッチ」において、G. K. の「教育の人間像としての有用な公民」、有用な公民への「発展過程」、有用な公民を育成するための「教育内容」及び「労作教育」について論じ、それぞれペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746～1827）の所説と比較。
- 267 文部省教育調査部 獨逸に於ける統一學校思想（『教育制度の調査』第7輯所収） 湘南堂書店 昭、55、3
前掲 191 の復刻版。
- 268 文部省教育調査部 最近に於ける精神發達段階に關する諸學說（同上） 湘南堂書店 昭、55、3
前掲 192 の復刻版。
- 269 東 日出男 ドイツ經濟教育思潮—經濟教育比較研究の一齣— タイムス 昭、55、3
特にⅢの2「ケルシェンシュタイナーの『労作学校』論」において、G. K. の労作学校論を「ドイツ諸改革教育運動の一般的風潮と提携しつつ、これを一般化したもの」として概説。また、〈附論文〉のⅣ「ヴァイマル初期における基礎学校（Grundschule）の問題」はI - 251 の再録。
- 270 玉井 成光 公民教育の概念—道德教育への指針— 早稲田大学出版部 昭、56、1

- G. K. の著 *Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung* (9. Aufl., 1961) の翻訳。なお、「訳者あとがき」において、彼の「前半生」を詳述。
- 271 山内 芳文 ケルシェンシュタイナー『教育者の心』(シリーズ<人間の教育を考える>『教師の力—ほんとうの先生とは』所収) 講談社 昭、56、5
「ケルシェンシュタイナーの生涯と教育理論」に簡単に触れた後、「文化教育学の絶対的な影響のもとで書かれた後期の作品」の一つである G. K. の著 *Die Seele des Erziehers* について詳論。
- 272 海後 宗臣 ケルシェンシュタイナーの生活と教育思想の発展 (海後宗臣著作集第3巻所収) 東京書籍 昭、56、5
I - 221 の再録。
- 273 藤沢 法暎・山崎 高哉 G・ケルシェンシュタイナー—労働の価値の再発見者— (天野正治編『現代に生きる教育思想』5—ドイツ(Ⅱ)—) ぎょうせい 昭、57、1
G. K. を、労働と教育が「切っても切り離せない関係にあるとの認識」を「ドイツ社会に普及した先駆者の一人」とし、彼の生涯と思想について概説するとともに、その今日的意義を考察。
- 274 山崎 高哉 ケルシェンシュタイナー—教育学の人間学的基礎 (下程勇吉編『教育人間学研究』所収) 法律文化社 昭、57、3
人間像ないし人間観に最も規定される度合いの強い教育目標の変化を中心に G. K. 教育学の発展過程を跡づけ、そこに認められる「有用な公民」から「道徳的性格」を経て「道徳的自律的人格」に至る教育目標の背景になっている彼の人間像ないし人間観の特徴を描出。
- 275 高橋 勝 ケルシェンシュタイナーの「作業学校論」の訓育主義的性格—デューイの「作業」観との対比において— (『教育学論文集—伊東博教授定年退官記念』所収) 横浜国立大学教育学部伊東教授退官記念会 昭、59、1
「作業学校の父」と言われる G. K. のペスタロッチとの関係はよく指摘されるが、デューイからの影響については「全く注目されていないのが現状である」として、G. K. の「デューイへの関心と受容の視角」を明らかにするとともに、デューイの「作業」観との対比において、G. K. の「作業学校論」の「訓育主義的性格」とその問題点について詳述。
- 276 山崎 高哉 技能陶冶論 (世界新教育運動選書別巻3 長尾十三二編『新教育運動の歴史的考察』所収) 明治図書 昭、63、5
「技能陶冶論」がペスタロッチ、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) 等の思想との関連で成立したことを明らかにするとともに、G. K. がその技能陶冶論の流れを継承しつつ、新教育運動の中で独自の技能陶冶論を構築し、これを学校組織に具体化したことの歴史的意義を解明。
- 277 大日本學術協會 入澤宗壽氏教育學 (日本現代教育學大系第4巻所収) 日本図書センター 平、元、11
前掲106の復刻版。
- 278 大日本學術協會 小林澄兄氏教育學 (日本現代教育學大系第6巻所収) 日本図書センター 平、元、11
前掲107の復刻版。
- 279 大日本學術協會 林博太郎氏教育學 (日本現代教育學大系第8巻所収) 日本図書センター 平、元、11
前掲109の復刻版。
- 280 大日本學術協會 篠原助市氏教育學 (日本現代教育學大系第12巻所収) 日本図書センター 平、元、11
前掲112の復刻版。
- 281 山崎 高哉 ケルシェンシュタイナー (寛田知義・岡田渥美編『教育学群像』1<外国篇①>所収) アカデミア出版会 平、2、3
G. K. の数多い業績の中で現代においてなお生きている代表的な業績を、①補習学校の改革と「職業陶冶論」の構築、②「労作学校」の理念の提示と実現の2点に絞り、詳論。
- 282 太田 和敬 統一学校運動の研究 大空社 平、4、2
特に第4章第1節「ケルシェンシュタイナーの統一学校論」において、G. K. を「統一学校運動」の「もっとも有力なイデオログ」として、彼の「公民教育論」と「労働学校論」、さらに「統一学校構想」及び「国家有機体説と教育の自律性の否定」について詳論、「帝国主義段階における支配階級のエデュケーション要求を理論化したもの」と批判。
- 283 山崎 高哉 ケルシェンシュタイナーの知られざる学校改革 (森田孝・西村皓・平野正久・長井和雄・小笠原道

- 雄編『人間形成の哲学』所収) 大阪書籍 平、4、6
従来の G. K. 研究においてほとんど触れられなかった「知られざる学校改革」である幼稚園の公立化と「特殊学校」の設立について紹介。
- 284 山崎 高哉 ケルシエンシュタイナー教育学の特質と意義 玉川大学出版部 平、5、11
先行研究が軽視してきた実際教育家 G. K. の活動に照明を当て、彼の教育学成立の背景を解明するとともに、理論と実践が不可分に結びついている彼の教育学の特質とその歴史的、現代的意義について詳論。
- 285 山崎 高哉 職業と教育（村田昇編『シュプランガーと現代の教育』所収） 玉川大学出版部 平、7、3
職業と教育との関係について優れた見解を展開したシュプランガーを、「職業学校の父」と言われる G. K. と比較しながら検討し、シュプランガーの職業観や職業陶冶論の現代的意義を解明。
- 286 米山 弘 ケルシエンシュタイナー（米山弘編『教師論』所収） 玉川大学出版部 平、12、3
G. K. は特に「労作学校の提唱者」として知られているが、同時に「燃えるような青少年への愛に満ちた教育的教師」であったとして、優れた教師へと大成していった前半生の歩みを辿るとともに、彼の著 Die Seele des Erziehers の要点を紹介。
- 287 山崎 高哉 ケルシエンシュタイナーの教育者論（下程勇吉・教育人間学研究会編『教育人間学の根本問題』所収） 燈影舎 平、12、5
G. K. の教育者論について、「教育者の資質の本質的特徴」「教育者の魂の基礎としての大ユーモア」「教師としての教育者」の3節に分けて考察するとともに、その意義と限界に言及。
- 288 伊藤 実歩子 戦間期オーストリアの学校改革—労作教育の理論と実践— 東信堂 平、22、2
第3章第4節「ブルガーの労作教育における目的論—「人間陶冶」—」において、ブルガーと G. K. との比較に言及。
- 289 乙竹 岩造 現代教育学汎論（『乙竹岩造著作集』第5巻） 学術出版会 平、22、3
前掲 181 の復刻版。
- 290 乙竹 岩造 日本教育学の枢軸（『乙竹岩造著作集』第6巻） 学術出版会 平、22、3
前掲 209 の復刻版。
- 291 篠原 助市 批判的教育学の問題（『篠原助市著作集』第1巻） 学術出版会 平、22、10
前掲 57 の復刻版。
- 292 篠原 助市 理論的教育学（『篠原助市著作集』第2巻） 学術出版会 平、22、10
前掲 118 の復刻版。
- 293 篠原 助市 教育断想—民族と教育其の他（『篠原助市著作集』第4巻） 学術出版会 平、22、10
前掲 200 の復刻版。
- 294 篠原 助市 教授原論—特に国民学校の授業（『篠原助市著作集』第6巻） 学術出版会 平、22、10
前掲 203 の復刻版。
- 295 篠原 助市 訓練原論（『篠原助市著作集』第7巻） 学術出版会 平、22、10
前掲 215 の復刻版。
- 296 長田 新 ペスタロッチー教育学（『長田新著作集』第1巻） 学術出版会 平、23、9
前掲 184 の復刻版。
- 297 石村 秀登 ケルシエンシュタイナー—社会生活の基礎を学校で身につける（石村華代・軽部勝一郎編『教育の歴史と思想』所収） ミネルヴァ書房 平、25、4
G. K. は「労作学校」の理念を提唱した人物として知られているとして、「労作の概念」と労作学校の目標である「道徳性の獲得と公民の育成」について概説するとともに、労作学校の実際にも論及。

Kerschensteinerbibliographie in Japan (Ⅱ)

Takaya Yamazaki

Osaka University of Comprehensive Children Education

Résumé:

Die kerschensteinerbibliographie umfaßt den in Japan gedruckten Aufsätze, Abhandlungen, Monographischen Darstellungen über Georg Kerschensteiner (1854–1932) und Bücher mit wesentlicher Bezugnahme auf sein Werk. Diese Bibliographie ist chronologisch nach den Erscheinungsjahren der Publikationen geordnet.

Wegen Raummangels befaßt sich die hier vorliegende Bibliographie nur mit Bücher über Kerschensteiner.